

# 屯田兵制度を創設した黒田清隆と開拓使

編集：江別屯田兵村遺族会・屯田兵制度研究会 発行：2018年3月1日

黒田清隆は、明治21年(1888)に第2代の内閣総理大臣に就任した政治家です。1840年11月9日(旧暦天保11年10月16日)に薩摩の鹿児島城下(現在の鹿児島市新屋敷町)の家禄わずか4石の下級武士の家に生まれ、文久3年(1863)に薩英戦争に参加した後、江戸で砲術を学び、慶応2年(1866)の薩長同盟に際しては、盟約の前に大阪で西郷隆盛と木戸孝允を引き合わせました。慶応4年の鳥羽・伏見の戦いでは、小銃第1隊長として戦い、北越戦争では北陸道鎮撫総督の参謀となり鯨波戦争に勝利し、北越戦争では劣勢を転じて新発田藩を降し、新潟を占領して勝利を収めました。

その後、庄内藩の攻略に際して、西郷隆盛と合流して寛大策をとり、米沢藩と庄内藩を帰順させ、庄内の鶴岡城を接收して、この地域の戦闘を終わらせました。明治2年(1869)に軍務官出仕となり、箱館戦争が起こると、箱館府知事から青森口総督に回った清水谷公考(しみずだに・きんなる)の参謀となり、新政府軍の指揮をとって勝利し、戦後は旧幕府軍の榎本武揚の助命を請願して、後の官職登用の道を残しました。

当時、慶応4年(1871)に太政官を中心にした三権分立制をとる明治新政府ができ、翌年、箱館戦争が終わるとすぐ開拓使を設置し、芝の増上寺に最初の役所を置きました。この年、蝦夷地は北海道と改称されました。黒田清隆は明治3年に樺太担当の開拓次官になり、樺太と北海道を視察して実情を報告し、翌4年にアメリカとヨーロッパ諸国を視察して、アメリカ農務長官ケプロンを開拓使の顧問に迎える約束をしました。開拓使の長官・東久世通禧(ひがしくぜ・みちとみ)が明治4年に侍従長へ転任し、黒田次官は開拓使のトップとなり、アメリカをモデルとした北海道の開発を積極的に進めました。

黒田次官が屯田兵創設を決意したのは明治6年(1873)のことで、その9月、開拓使の東京出張所内に「屯田課」を設置し、永山武四郎など有能な人材を集めて、早くも11月には「北海道兵備設置之建議」という建白書を作らせました。直ちに黒田は政府の実力者である大久保利通に会い、屯田兵創設が急務であることを説明して了解を求め、納得した大久保利通は、右大臣・岩倉具視を説得して内諾を得ました。

こうした根回しをした上で、黒田は明治6年11月18日付けで、屯田兵制度の必要性を唱える「建議書」とその内容、必要な予算額などを明示した文書を添えて、明治政府の最高行政機関である太政官(明治18年から内閣。)に提出しました。太政官は直ちに大蔵・陸軍・海軍・外務など各省に告知し、検討させました。黒田は更に手続きをとり、11月24日に部下の調書廣武と堀基を従えて明治天皇に拝謁し、北海道の治安維持の緊急性を説明し、天皇のご下問に答えました。その結果、太政官は明治6年12月25日付けで屯田兵設置を認める御達書を開拓使に発行しました。屯田兵制度の基本となる「屯

田憲兵例則」の草案は屯田課で作られ、陸軍省との協議の後、開拓使から太政官へ提出され、明治7年10月30日付けで原案通り決裁され、屯田兵創設は黒田の上奏から凡そ2年で実現しました。こうして明治8年、最初の屯田兵が札幌郡琴似村に入植しました。

これは黒田の功績と言えますが、割と早く実現した大きな理由は、明治6年5月の「福山・江差騒動」で、開拓使の警察力がいかに無力であるかが、中央政府内に知れ渡ったことと、共有地の樺太が事実上ロシア領化して、ロシア帝国の領土的野心が明白になったことの2点です。黒田清隆はすぐれた軍人でしたが、行政官としては後の「官有物払い下げ事件」などをみると毀誉褒貶が相半ばするようです。

明治15年に開拓使は廃止され、黒田開拓長官は更迭されて、屯田兵は陸軍省の管轄となり、北海道は3県1局の時代になります。醜聞と疑獄事件で、名声に傷を負った黒田清隆は、その後も薩摩閥の重鎮として力を持ち、第2代内閣総理大臣に就任できたのも、薩長の均衡を保つためだったと言われますが、「時代が必要とした人物」ではあったのでしょう。明治33年（1900）に脳出血で死亡、葬儀委員長は榎本武揚でした。

